大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

いのちとくらし、教育が大切にされる大阪を

４・９大阪府知事選挙　投票に行ってねがいを叶えよう

３月２３日告示、４月９日投開票で大阪府知事選挙がおこなわれます。大障教は１月３１日の執行委員会で大障教も参加する「明るい民主大阪府政をつくる会」のたつみコータローさんの支援決議を確認しました。いのちとくらしを大切にし、教育のあり方や私たちの働き方を変えるチャンスです。どんな府政を望むか、職場で語り要求を出し合い、その要求実現を私たちの手でつかみましょう。

１５年におよぶ維新府政のもとで、大阪府の教育予算は６２８５億円（２００７年度）から５４４億円（２０２３年度当初予算案）になり、８４１億円減らされました。

大幅な教育費削減のもと、何が起こっているのでしょうか。

一人ひとりを大切にする教育を

大阪では不登校の子どもが年々増え、１５年度には小中学校合わせて１万人を超え、２１年度は小中合わせて１８０００人を超えています。また、暴力行為発生件数・いじめ認知件数は小学校で全国ワースト２位、中学校は全国ワースト（２０２１年度データ）となっています。これらは国連から再三是正勧告を受けている「過度に競争的」な日本の教育制度の中においても、とりわけ大阪は「チャレンジテスト」「すくすくウォッチ」など、「テスト漬け」の競争によって、子どもたちに大きなストレスを与えていることの関係性が指摘されています。

また、国は小学校において、年次進行で３５人学級を実施していますが、全国では各都道府県独自の少人数学級を実施しています。山梨県は、小学校１・２年で２５人学級にしています。独自制度のない自治体は大阪を含む４府県です。大阪でも独自の少人数学級の実施を求めます。

府立高校は、２０１２年制定の「府立学校条例」によって、３年連続定員割れで統廃合の対象とされ、この１０年間で１７校の廃校が決定し、今後５年間でさらに９校廃校する計画を発表しました。少子化の今だからこそ、高校をつぶすのではなく、少人数学級を子すめるべきです。府教委も、エンパワメントスクールや工科高校では35人学級を実施し、少人数学級の効果を認めています。

教職員を増やし、長時間労働の解消を

大阪は「教育に穴があく」事態も深刻です。「教育の安上げ」のために教員採用を抑えて臨時的任用の教員を多用しているため、代替の先生が見つかりません。

長時間労働の実態も深刻です。大阪府は一斉退庁日の実施や学校閉庁日を増やすなど、仕事量はそのままに、見せかけだけの勤務時間の縮減をねらっています。

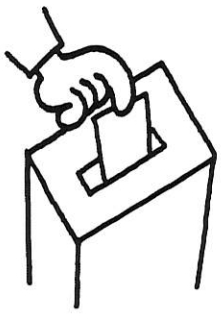
長時間労働を解消するためには抜本的に教職員を増やさなければなりません。

支援学校を大規模に増設し、学習環境の改善を

府教委は２０１８年、支援学校における知的障害児童生徒の増加への対応として、「府立支援学校における知的障がい児童生徒の教育環境の充実に向けた基本方針」を公表しました。方針は「新校整備」は必要最小限にとどめ、「特別教室等の転用」や「通学区域割の変更」などをすすめるとしました。これによって、「過大・過密」「教室不足」は深刻化し、２０２２年３月に公表された文科省教室不足調査によって、大阪の支援学校の教室不足は全国最悪の５２８室であることが明らかになりました。「過大・過密」「小学部児童の増加」等の影響で、年々教員配置が悪化しています。「過大・過密」「教室不足」「教員不足」を解消するためには地域に根ざした適正規模の学校を適正に配置する必要があります。

あなたのねがい　投票に行って叶えよう

維新府政のもとで「教育こわし」がすすめられ、「評価・育成システム」の賃金リンクや他府県にない長年の賃上げ凍結など、教職員いじめが続いてきました。



４月９日投票の大阪府知事選挙は私たちのねがいを叶えるチャンスです。期日前投票も活用し、投票に行きましょう。

書記局のひとりごと

２月２３日、大阪教職員組合障害児教育部（大教組障教部）結成３０周年記念集会が開催され、大阪の障害児教育運動をともにとりくんできた仲間として大障教からもお祝いに駆けつけた。コロナ禍により実に２年越しでの開催となったが、現役＆ＯＢ世代・府下の関係者等が一堂に会し、久々に顔を合わせた喜びで会場には温かな笑顔があふれていた。

大教組障教部は、障害を持つ子どもたちの教育の充実・発展を願い、障害児学校・学級で働く教職員の要求実現のために、子どもたちの幸せを願う全ての父母・府民・教職員が一緒になって闘い実現する組織として１９９０年に結成を宣言。

結成から３０年間、大阪の障害児教育において、「共に学び、共に育つ」教育を掲げ、障害のある子どもも通常学級で学ぶことを「原学級保障」として推し進められてきた大阪で、一貫してその問題点を指摘し、障害のある子どもたちの発達を保障する教育の充実・実現を求める運動を文字通り先頭に立ってすすめてきた組織である。

記念集会は、日本の障害児教育の歴史と大教組障教部運動の歩み、権利としての障害児教育を切り拓いてきたＯＢ世代の苦難の時代を知れた貴重な機会であった。中でも、「これまでの歴史と思いを若者に繋ぐ役割がある」と語られたＯＢの言葉が印象深かった。会場にあふれる笑顔は、脈々とつながる先人の歴史と思いのバトンリレー、支え合ってきた仲間の存在に裏打ちされているという事実に触れて心が奮えた。

将来私も笑顔で語れるよう、次の世代の仲間とつながりながら、大障教運動をさらに大きく前進させていきたい。

「先生が足りない」実態に応じた教職員の増員を

障害のある教職員への合理的配慮、寄宿舎教員の採用選考実施等を訴え

大障教課別交渉
（教職員人事課・教職員企画課・高等学校課）

2月3日、大障教は教職員人事課・教職員企画課・高等学校課と課別交渉を実施しました。

交渉には、11分会15人が参加し、障害のある教職員への合理的配慮、学校の実態に応じた教職員の増員、代替教員の速やかな配置、障害児学校の実態に見合った事前任用措置、15分単位で年次休暇取得できるようシステム等の整備、寄宿舎教員の採用選考実施などを求めて訴えました。

交渉での主なやりとりを紹介します。（次号に続く）

合理的配慮として研修会等に手話通訳派遣を

だいせん聴覚高等支援学校分会は、聴覚障害のある教員が研修会等に参加したくても手話通訳等の情報保障がないために受講をあきらめるケースがあることなどを示し、合理的配慮として必要な予算措置を求めました。

高等学校課は、「校長マネジメント経費をすべての府立学校に対して配当し、校内での使途については、校長・准校長のリーダーシップのもと、それぞれの取組みに係る予算を精査し、予算の範囲内で効果的に活用いただいている」などの説明にとどまりました。

だいせん聴覚支援分会
世森さん

教職員人事課は、「合理的配慮等の相談を受け付ける『障がい者職業生活相談員』を選任し、相談内容に応じて関係各課と協議・検討するしくみがある」と説明しました。

だいせん聴覚高等支援学校分会からは、聴覚障害のある教職員への合理的配慮として、電話中継リレーサービスについても予算措置を講じるよう求めました。

教職員人事課は、「手話通訳派遣の件と同様に、『障がい者職業生活相談員』に相談いただきたい」と説明しました。

障害児学校の実態に応じた教職員の増員を

寝屋川支援学校分会は、この間の児童生徒数と教員配置数の推移を資料で示し、「過大・過密」の進行と小学部の激増によって教員不足が深刻化している実態を訴えました。

枚方支援学校分会は、小学部児童数が開校当初の1．87倍に膨れ上がる一方、交野市と枚方市の一部の高等部の通学区域割変更に伴い、高等部生徒の大幅な減少で児童生徒数に対する教員比率が著しく悪化している実態を示し、教職員の増員を求めました。

箕面支援学校分会は、人工呼吸器を使用するなど、高度な医療的ケアを要する児童生徒が増加するもとで、安全を確保しながら、よりよい教育活動をすすめていくために教職員の増員を求めました。

枚方支援分会
林さん

教職員人事課は、「『標準法』に基づき、学級数に応じて措置することを基本とするとともに、障がいの重度重複化への対応や、障がいの種別に応じた指導の充実などを図るため、それぞれの学校の状況を踏まえて、教員の加配措置を行っている」「今後とも、支援学校における教育水準や教育課題への対応等を踏まえつつ、法令に基づく定数を確保していく中で、適正な教員配置に努める」と説明しました。

代替職員の速やかな配置を

箕面支援分会
福川さん

寝屋川支援学校分会、枚方支援学校分会、箕面支援学校分会からは、若い先生が増え、産育休を取得する先生が増えていること、職場の多忙化に拍車がかかり、病気休暇・休職を取得する先生が増え、その先生方の代替が配置されないもとで更なる負担が生じている実態などを示し、教育に穴があく事態が起こらないように対策を講じるよう求めました。

教職員人事課は、「学校における年度途中の欠員や産育休の取得に対する代替措置については、学校運営に支障が生じないよう必要な措置を講じているが、一部の学校では、候補者が見つからず、必要な講師が速やかに配置されず、欠員となっている状況があることは重く受け止めている」「代替講師の人材を確保するため、府や市町村の関係施設等での講師募集チラシの配布やインターネット媒体を活用したPRに加え、講師登録説明会や免許状執行者等を対象とした研修を開催している」等の説明をしました。

第22回全国障害児学級＆学校学習交流集会in京都　感想ダイジェストその5

全体会は、京都の青年の先生による構成劇から始まった。「もっと子どもと丁寧にかかわりたいのに」「もっと自由に実践したいけど」と、それぞれに「ねがい」を抱えつつ、現状との葛藤の中で思い悩む姿が、自分自身と重なった。「今の学校は誰のための学校なのか」ということを強く感じた。「子どもの居場所であってほしい」「先生が楽しく、生き生きと働ける場所であってほしい」そう思いつつ、果たして、今の学校は本当にそうなっているのだろうか。京都府立与謝の海養護学校の「学校に子どもをあわせるのではなく、子どもにあった学校をつくろう」という開校当時からの理念は、決して過去のものではなく今こそ大切にしたいものだと思う。

全体会の最後には立命館大学の三木裕和先生の講演があった。「若い頃は、職員会議でしどろもどろで発言していた。どうしても上手く話せない。しかし一生懸命話しているその姿にこそ輝くものがある。しどろもどろだからこそ、伝わる真実がある。自分の未熟さを決して恥じないでほしい。私はダメだなあと思わないでほしい」この言葉を聴いた時、思わず涙が溢れた。「本当に自分はこの仕事に向いているのか？」と不安を抱えている先生方に今回の話を聴いてほしいと強く思った。

（堺支援大手前分会　奥　正行）